

自荒墟懷古、轉入  
天慶時事、轉折好

一跌用長句、有法  
有力

添此一節、文極有  
著落

皆山、左者低、臥眠之狀、右者高、仰睨之狀、又行里餘、達浦戶、登陸而行、十數丁、遂達城墟、乃拂石以坐、而覽左右、北者白砂青松、明媚如畫、南者水天一碧、風帆散點、地雖不高、全地景勝、悉萃于一眸中、而如荒墟幽邃、亦使人發懷古之感焉、既而日暝、悲風蕭颯、水激山怒、如大鬼小鬼哭、因憶天正慶長之際、長曾我部元親、樂于此、日夜淬勵、以圖大事、今星霜殆三百餘年、漁人樵父、尚能日夕謳歌、而不足慰其英魂、則不平之氣、發為風雲、天地黯淡、殺氣襲人、苟自非隆造士育英之法、以起奇傑、非常之人、將何以足一變山川、忿惋之氣乎哉、吁、余之遊鎮西也、一山一丘、腳踏而目覩之、心甚樂焉、今之所遊、悵然弔昔人、於千載嗟嘆、久之不能去焉、回視余弟、獨私拭淚、余亦靜坐、瞑目感慨、不能已、目已沒、顧望而下、復入舟、舟人用力、搦々甚勞、已而得達于松端、急覓來路而歸、回顧浦戶城墟、則黑雲蔽天、月光朦朧、意更覺蕭條矣、

鋪叙精細、中帶感慨、遊記之佳者

又曰鎮西之地、士庶彬彬、我州則如何、意在隱躍之間、善讀者知之

乙未十月上浣

吾醒廬主人評閱

今茲歸省拜先君墓、上立碑不勝追慕之情、臨去而賦

稼堂陳人

音容歷々在雙眸、何識星霜已二周、一片青紙數行淚、泣言展省又來秋。

小濱道中作

文苑

五十五

山高蟬聲遠。湖近岸形低。抽葦掃雲石。新詩隨得題。

舟過笙嶋

橫絕太湖駛若風。奇巖擎樹似浮空。忽過笙嶋爲吾說。此下水深七十尋。

過廣嶋拜行在所跡不勝感泣有此作

去年海外耀皇威。此地君王駐六駢。今日微臣來拜伏。一叢秋露點征衣。

余自八月中旬患眼至十月猶不痊時以厚紙作袋入一部字典睡則用之

涑水用圓我用方。警眠養病各相賞。五句一臥閑窓夢。只見枕中書味長。

中秋觀月於醉月亭

雲晴半空無點塵。廣寒宮裏露華新。忽看軒下江風起。吹落峯頭月一輪。

越山

山內正瞭

降巒重疊際。凹凸里餘程。樹塞溪聲遠。日暗松樹橫。路隨山勢轉。人逐白雲行。到處多幽趣。

思詩取次成。

松雨

龍蟠鳳翥萬株松。讓々清風冷如冬。千歲翠垂寒雨裏。一層祠宇是仙蹤。

荒居

空宅寥寥書鎖門。藤蘿荆棘設荒垣。屋鄰岩子城邊地。路接山王祠外村。蔬菜青柚養野鳥。

橘柚黃熟附林猿。主人去此知何日。三徑猶看松菊存。

菊

秋至重陽猶一句。夙看籬菊色香新。栽培恰得陶家術。花葉曾無半點塵。

醉歸用陸放翁詩韻

嵐翠重々輕霧飛。江楓當路錦成團。山猿野鶴添吟興。渙笛樵歌伴醉歸。鳥道高懸雲樹嶺。  
溪煙深鎖寺門扉。時看岸下秋風起。亂墜蘆花雪漲磯。

批評

『文學上に於ける現時の國家主義』を讀む

孤松生

深夜月明に乗じて歩む。忽ち顧みて、怪影の我を趁うて走るものあるに驚き、疾走すること百歩、再び顧れば、怪影の我を趁うものあること以前の如し。熟視すれば、何ぞ料らん自己の地上に寫せる陰影ならんとい。世に一種の妄想に耽るものあり。千辛萬苦、妄想を構へ、空理を事とし、時に或は自ら誇り、又或は自ら杞人の憂をなす。其愚豈に自己の陰影に心を動かす怯者に及ばずとせんや。

殊に文學上の妄想家あるに至りては、社會を益することなく、却て弊害を醸すこと往々これあり。豈に大に戒めざるべけんや。前號『文學上に於ける現時の國家主義』の記者楮村學人の如きハ、或ハ生の所謂文學上の妄想家の一人にあらざるなきを得んや。

現象なきを現象ありとするハ、これ即ち妄想なり。事實を誤認曲解して之を基礎とせる議論は、これ即ち妄想なり。妄想既に斯の如く根底なく、理由なく、基址なし。其探るに足らざる、知るべきのみ。楮村學人が『現今國家主義の大勢を利用し、國民文學の仮面の下に、一種の保守的、排外的、攘夷的文學